

# 解離性同一性障害のロールシャッハ反応

## —人格構造特性と神話性—

角藤 比呂志

### I. はじめに

解離性同一性障害（以下 DID と略す）に関する研究報告は、1970年代以降、北米を中心に急増してきた。わが国では、1990年以降、散見されるようになり、最近では、専門誌のみならず多くの単行本やマスコミなどでも取り上げられるようになってきた。しかし、こうした症例数の漸増にもかかわらず、ロールシャッハ法（以下 Ror 法と略す）による研究は未だ多くをみていない。欧米では、Wagnerら(1983)、Barach(1986)、Labott&Leavitt(1992)、Armstrong(1991)などの指標（sign）研究があり、わが国では、吉田ら(1994)、上芝(1995)、藤田(1997)、福永(1999)などの事例研究が見られるが、統一した見解には至っていない。

Putnam(1989)は、Ror 法の有効性について、症例数の少なさ故に「現時点では一般化は到底無理である」と指摘するが、本論では、解離性同一性障害の一事例を提示し、人格交代の続く「不安定期」と全く人格交代が生じなくなった「安定期」の2度に渡って施行した Ror 法及び MMPI、DES(Dissociative Experiences Scale)の結果を比較検討することにより、解離性同一性障害の人格構造特性と神話性について若干の考察を加えたい。

### II. 事例の概要

[事例] A子 17歳 女性 高校在学  
[家族構成] 父親（50歳）母親（49歳）妹（13歳）の4人暮らし

#### [生活歴及び現病歴]

発育に特に問題はなく、「手のかからない子」であった。4歳時、妹が誕生。「妹の方が可愛くて」注目を集めることが多かった。

A子は、地元の小・中学校を卒業後、演劇を志

望し、専攻科のある高校へ進学したが、小・中学時代に2度、教師から性的虐待を受けたという。

高1の時、誘因なく「学校や電車の中で悪口を言われている気がする」と訴え、近医受診。心療内科を勧められた。この頃より、時々反応が鈍くボーとしていたり、突然興奮して泣いたりといった情動不安定が続いたが、母親はテレビドラマの影響と思い、「気にしないように」と説得した。

A子は、ある時、「5人の人格があり、その中の一人から暴力を振るわれる」と母に語り自傷行為が続いた。本人が「本当の自分に戻りたい」と繰り返し訴えるため、B病院に1回目の入院。

入院後は、退行した状態であり、いつもぬいぐるみを抱えていたが、担当医に、母親との情緒的距離のとれなさを語り、次第に回復。外出時にも人格の交代は見られず、約1ヶ月で退院した。

退院後、登校するが孤立がちとなり、家族からも見放される状態となる。過食・多飲となり、抑うつ的で「死にたい」と訴えるようになった。この頃、2人の交代人格が現れ、自傷行為も頻回に見られるようになったためB病院に第2回目の入院となる。

入院後、9人の別人格が存在することを語り、しばらく不安定な時期が続いたが、「学校を辞めてバイトをしたい」と言うようになった。徐々に、人格交代も少なくなってきた頃に Ror 法を施行。施行時は、語り口調と容姿から子供っぽい印象を受けた。

その夜、別人格へと交代し不穏状態となったため、しばらく保護室にて治療を継続し、約3ヶ月後、ほとんど人格交代が起こらなくなった頃に第2回目の Ror 法を施行した。施行時は、前回とは一変し、声の tone は低く、落ち着いた雰囲気であった。

Ⅲ. 各種アセスメントの結果

は次のようである。

不安定期と安定期の各種アセスメントの結果

(1) ロールシャッハ法

表1 ロールシャッハプロトコル (不安定期)

<p>I 8" -70"</p> <p>女の人と男の人が、こっちに二人とこっちに二人、これが女の人で、こっち側にいるのが男の人</p> <p>他にはキツネ、ここが耳で、こうなっていて、ここが目で、ここが口とどうか、とんがってる、キツネってこうなってるじゃないですか</p> <p>II 4-40</p> <p>これはクマの死骸、クマは二頭倒れてて、血が出てる</p> <p>これはチョウチョ</p> <p>あとは、ここにトリがいる、そんなもの</p> <p>III 3-66</p> <p>これは人が手をいろいろみたいところにしている、人が二人いて</p> <p>これはこの人の子供で、ちょっと今はこっちに見えるんだけど、本当はお腹の中にいる、子供ってこういう形になるじゃないですか</p> <p>それでこれは心臓、こっちに、本当はお腹とかに入っていないもの、ここのところに入れたら逃げちゃった</p>	<p>このお腹、お腹が膨らんでいるところが、手をこういうふうに上げている、で、女の方はやっぱり小さいから、それを男の人が支えてあげてる、で、それを男の人マントみたいな着てて(女の人?) 横向いています(男の人?) マントで、お腹で、お尻で、足で、手を置いているのか、つかんでいるのかよくわかんない、で、このへん顔</p> <p>ここが耳で、ここが輪郭、とがってて、ここの空洞が目、この下は、化粧してるみたいなペイント</p> <p>ここちょっと出るところが耳、撃たれた跡かなんか、銃で、こちらへん血が出てる、こっちははずり回ったから血が出てて、こんな格好で倒れてる、二匹いる(クマっぽいのは?) 色と大きさ、あとよくクマって撃たれるから、この血が出てるところがチョウチョの形してるなあって、こっちが上で、こっちが下</p> <p>くちばしで、このちっちゃいのが目、ここが翼で、トリの尾とどうか、しっぽとどうか、いいトリ</p> <p>ここが顔、鼻、頭になってて、からだ曲げた感じで、いろいろとどうか、ここがすごく悪いところ、だからここに手をいれたとどうか、手をいれたというよりはなんか悪い世界に入っちゃったのをこの絵で表わしている、この二人がなんか悪いことをして、悪い世界に手を染めちゃって、手を染めた、だから妊娠していたのに赤ちゃんいなくなっちゃって、心臓も使えなくなっちゃって、子供も外に出ちゃった、でも、これとこれは別のところで生き続けている</p> <p>こっち頭、へその緒、管みたいな(赤ちゃん?) 細い管とこういう形になるじゃん、だからそういうところ</p> <p>ハートの形かなく(chartと比較) そうなると、赤ちゃんはこっちだとみえない、心臓はかわんない</p>	<p>①男女四人 W M 干 Hcg Adef Dcl Mal</p> <p>②キツネ Ws F ± C' F Ad N</p> <p>①クマの死骸、 血 W FM 干 FC' CF mF A Bl Hsm Agl Hha</p> <p>②チョウチョ D4 F ± A N</p> <p>③トリ SD F ± A Mor Man</p> <p>①人、悪い世界 お腹の中の子供 心臓 W M-FC H Ats P Athr Df Bf</p>
---	---	--

IV 2-45

これは大きなクマ、ここが顔で、ここに大きな手があって、ここは足ここに大きな木がある、木はさえぎっているんですけど、でっかいからさえぎれない

ここが顔で、これは二匹じゃなくて、大きいのが一匹いる、これが手で、かまえてて、大きな足があって、ここに木が一本、大きいというよりは細長い木が一本ある感じ、このクマが、もっと大きい木だったら隠れちゃうんだけど、この木があまり強い木じゃないから、細い木だから、こっちのクマのほうが強くて、このまま歩いてきたら、この木も折ってそのまま前に進んじゃう（歩いて来る感じ？）歩いてくるみたい（大きい？）なんか足が顔より全然大きいから、でも顔はちょっとキツネっぽい、だからもしかしてキツネが化けてクマになったのかもしれない、大きいからクマに見える

①大きなクマ  
大きな木  
W FM ± FK  
A Pl  
Athr

V 4-23

これは、これもチョウチョみたい

ガみたい（笑）葉っぱの、葉っぱっていうか、羽の形がきれいじゃない、だからチョウチョとはいわない、ここが頭で一匹だけ、こっちは足の部分で、羽がついてる

①チョウチョ  
W F ± A P  
N

あと、葉っぱにも見える、そんな感じ

何枚かこちらへんにある、ちょっとこの先にこういうのついてる葉っぱがある、一枚一枚で二枚

②葉っぱ  
W F ± Pl  
N

VI 2-40

これは天狗、ここが頭で、ここが顔の輪郭、ここが鼻、口、であご、全部ここにあるの、二つとか、二人とか、多い

バイオリンにも見える、ちょっと形が確かじゃないけど、鼻とかなくて、そうすると形が、上が持つところで、こういう形で、ここに線がある、弾くバイオリン（天狗？）それはここが頭で、こっから顔が始って、ここが目、へこんじゃってところで、ここがお鼻、こっちは口、2匹、2匹じゃない、二人いる、こう伸びてる

①天狗  
W F ± (Hd)  
Athr

②バイオリン  
W F ± Music  
Prec

VII 11-42

これはゾウ、子ゾウかな、ちっちゃいゾウ

こっちは手で鼻、で顔がゾウっぽい、耳はここかここで、目はついてないんだけど、ここが胴体、手をちょっと出していて、からだで、こっちはからだなのか、何かに乗っているのか、ちょっとわかんないですけど

①子ゾウ  
W FM ± A  
Dch

あとは、ここがなんか女の人の輪郭っぽく見える

ここが女の人の胸の部分、でここが耳で、顔がこっちにある、でも顔は写ってない、ここが耳で、ここがからだの部分

②女の人の人  
Sdr F ± Hd  
Mi

VIII 4-31

ここがトラみたいやつ

トラというかヒョウ、顔で、足、しっぽが伸びてるわけじゃないんだけど、からだはここ、こちらへん

これがトカゲ	まで、足は一本ない、ここは下の絵に付け足すからこっちは入らない（特にトラ？）顔みたいのついてる、ここが耳っぽく感じたから	①トラ dr F 干 A N
ここが自然というか、ここらへんが自然	このざらざらしているような、皮膚の感じがトカゲっぽく見えた（ざらざら？）細くくなみなみになってる（まわりの？）そうそう、中も色がちょっとちぐはぐしてるというか、それでざらざらしてるみな感じがある（あとは？）目で、からだ、手、足（横から見た？）そう、ここ一匹、こっちも一匹	②トカゲ D3 Fc 土 A Adis
Ⅸ 5-35	深い意味ないんだけど、なんとなく自然っぽいなと、ただ自然っぽい、森とかの自然（？）色とか、ピンクとか、オレンジとか、ミドリ使ってて、可愛いというかきれいというか（関係？）自然があるからトラとかトカゲあるという感じ	③自然 W CF Abst Pnat
これは全部で地球、それしか見えない	こういうの国みたい形してて、ここの青くなるから、ここも地球の、地球は青いから、それを表わしているような、ちょっとこれ丸っぽくなるから、これ全部で地球（丸っぽいのと青いのと）は以下にあるこの四つが、形がりんごっぽい、色もああ、これ生き物っぽい、恐竜みたいな感じ、ここが目で、お鼻で、口で、こっち（D1）はよくわかんない	①地球 W CF Geo Aev
あとここらへんがリンゴ これもなんか生き物に見えるけど、何かはわからない	ここがカブトのツノみたいになってて、茶色い色とここらへん手とかついてて、でカブトムシが二匹、木に樹液を吸いに来た	②リンゴ D2 FC 土 Food Por
Ⅹ 7-54	ここに、色とか形が葉っぱっぽい、こっちの葉っぱは秋で、こっちは春	③恐竜 D3s+3s F 干 Ad Athr
これは葉っぱだったり	クモは、からだで、足がいっぱい出てる	①カブトムシ D3+3 FM 土 FC A Pl
これはクモだったり、あの、生きてる虫のクモ	手で足で、ちょっとからまってるんだけど、で、このシカって普通じゃないから、首が折れちゃってて、思いっきりジャンプしたみたいな感じ（シカらしさ？）手と足と首、胴体が細長い、ほっそりした感じが	Dor Hh ②春の葉っぱ D11+11 CF Pl N
これはシカに見える、首がちょっと折れちゃったみたいだけど	目で、化粧してて、鼻で、ヒゲがあって、王冠は見えないけど、王冠の飾りが見えてて、なんかかぶっているのかもしれない、目のところ化粧している	③秋の葉っぱ D9+9 CF Pl N
ここが王様に見える、これが髪の毛で		④クモ D1+1 F 土 A P Adis
		⑤首の折れたシカ D4+4 FM 土 A Hhad
		⑥王様 Ds15 F 土 Hd Daut

表2 ロールシャッハプロトコル (安定期)

<p>I 6-37                      これ人がいて、二人、人がいて、で、ここ (D<sub>3</sub>) はべつになにも感じない、ここ (D<sub>1</sub>) だけ人がいる感じあと大きな一つのキツネみたいに、それだけです</p>	<p>こここの部分、手があって、顔がある、で、二人みたい                      ここが耳で、口とんがってる、ここが顔の輪郭(?) 目とか、目がつり目だから</p>	<p>①人が二人                      D<sub>1</sub> F 干 H                      N                      ②大きなキツネ                      Ws F 土 Ad</p>
<p>II 3-25                      これはなんかクマが死んでるような、で、ここがチョウチョに見える</p>	<p>手で手で足で、この赤い部分 (死んでる?) 血が出てて、ちょこっというのが耳 (血が出てる?) 倒れてる感じ、足とかあって、全体的な感じが(クマ?) 大きさというか、形的に、色とか</p>	<p>①クマが死んでる 血                      W FM 干 FC'                      CF mF</p>
<p>III 7-35                      いろいろあって、人がこうやって、手出してる、で、ここにチョウチョ、あとこれなんか生まれる前の子供みたいな、たぶんそんな変わってないと思う、前にもそんな言ったような気がする</p>	<p>(チョウチョ?)ここにチョウチョ、ここがこういう羽、ここがしっぽじゃないけど、チョウチョの感じが                      ここがいろいろで、ここが女の人の手、足、ここが顔、ここが胸、で、ここがチョウチョに見えて、こっちが赤ちゃんの時、へその緒でつながってるみたいな、そのへその緒でつながった赤ちゃんみたい (特に女の人?) 何となく体型が女の人っぽい (チョウチョ?) 羽のところ (赤ちゃんはお腹の中にいる?) そうそうです、へその緒と赤だからです</p>	<p>②チョウチョ                      D<sub>4</sub> F 土 A                      Man                      ①女の人の人                      D<sub>1+1+6</sub> M 土 HP                      Ps                      ②チョウチョ                      D<sub>4</sub> F 土 A                      N                      ③生まれる前の子                      D<sub>2+2</sub> FC 干 H                      Df</p>
<p>IV 2-25                      大きなクマっていうか、大きな人がズンと立ってる感じ、で、ここが木に見える</p>	<p>これが足で、これが手で、なんかズンと立ってるような感じ、あとここに木がある感じ、枝葉とかない (大きなクマと人はどっち?)クマ、顔の部分とか、大きさとかから</p>	<p>①大きなクマ                      W FM 土 A                      Athr                      ②木                      D<sub>2</sub> F 土 Pl                      N</p>
<p>V 2-16                      これもチョウチョに見える、それだけかな</p>	<p>顔で、羽、しっぽというか、そういう感じで、一匹のチョウチョ</p>	<p>①チョウチョ                      W F 土 A P                      Man</p>
<p>IV 2-15                      これは天狗、あとはバイオリン、そんな感じ</p>	<p>ここ鼻で、口で、耳で、一匹、二匹、二人いるっていうか、あと、ここがバイオリンの弦というか、ひもみたいなくっついてる、こういう形でバイオリ</p>	<p>①天狗                      D<sub>2</sub> F 土 (Hd)                      Athr</p>

Ⅶ 1-17

これはゾウの、ちっちゃいゾウ、二匹いる感じ、それだけ

Ⅷ 4-23

これは、ここがトカゲ、で、ここにヒョウみたいのがいて、あとは森って感じ

Ⅸ 3-39

これは全部見て自然って感じ、で、ひとつひとつは見えない、あってもここがなんかリングみたい

なんか地図みたいな感じ  
それだけです

X 4-26

ここに子ジカがいて、あと、クモ、カブトムシとか、あとはここが王様みたいな、そんな感じ

ン、全体というよりこういう形

ここが鼻で、ここが顔で、ゾウ、子ゾウが二匹(子ゾウ?) なんとなくおおきさとかちっちゃいから

(トカゲ?)ここ、で、これがヒョウ、あとはなんか自然っぽい(あと森ってそういうこと?) はい  
(トカゲは?)ここがしっぽで、ここが手、そんな感じで二匹

(ヒョウ?)ここに二匹

(森?)なんとなく色合いとか、とくにそれなりの形じゃないけど、なんとなく色合いとか

(自然?)なんか地図、地図っぽい感じ、この青い部分が地球っぽかったから、

(地球っぽい?)この水色の部分、丸い(そして)地図

(地図?)なんか国の形になっている、全体で

(リング?)リング、ピンク色で(自然?)色合いから

(子ジカ?)頭で手で胴体で足、でこれがクモ、なんか全部、足で、顔とかはどこかわかんないんだけど、で、これがカブトムシ、で、これが王様

(カブトムシ?)色とここがツノあるようで

(王様?)目で鼻でヒゲがはえてる

(特徴?)顔つきというか、目でヒゲとかはえているところ

②バイオリン

W F ± Music  
Prec

①子ゾウ

D1+1 F ± A  
Dch

①トカゲ

D3 F ± A  
Adis

②ヒョウ

D1+1 F ± A P  
N

③森

W CF Na  
N

①自然

W CF Abst  
Pnat

②リング

D2 FC ± Food  
Por

③地球

W CF Geo  
Aev

①子ジカ

D4+4 F ± A  
Dch

②クモ

D1+1 F ± A P  
Adis

③カブトムシ

D3+3 FC' ± A  
Hh

④王様

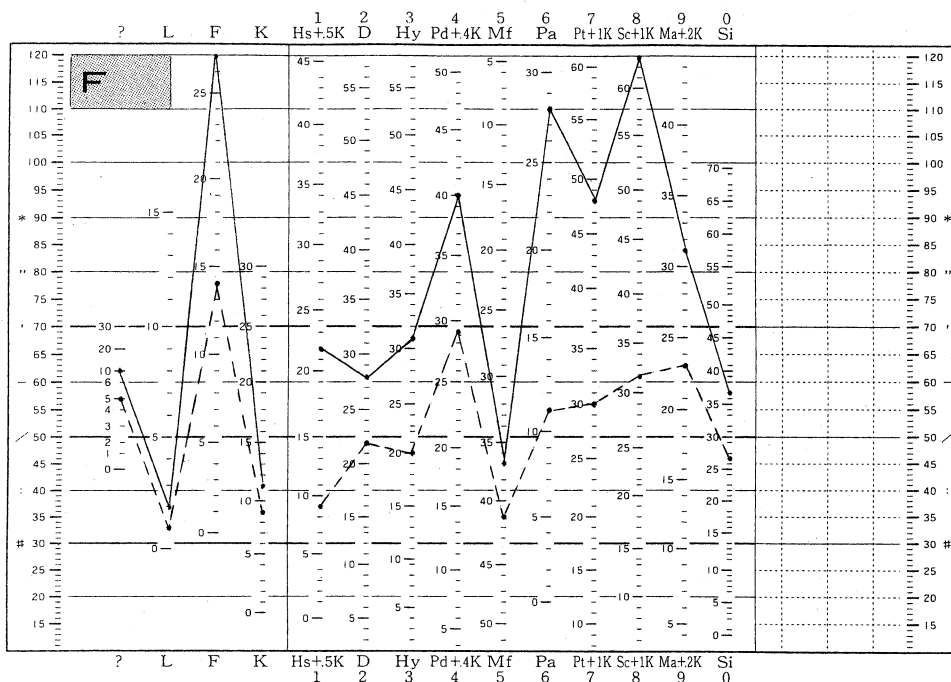
Ds15 F ± Hd  
Daut

表3 Rorschach Summary Scoring Table

R (Total R)	25	23	FC:CF+C	1.5 : 4.5	1 : 4.5
T / R <sub>1</sub>	5	3.4	FC+CF+C : Fc+c+C'	6 : 3.5	5.5 : 2
non-color	5.4	2.6	FM : M	4 : 2	1 : 1
color card	4.6	4.2	FM+m : M	4.5 : 2	1.5 : 1
W : D	12 : 10	8 : 15	F%	44	61
W : M	12 : 2	8 : 1	Σ F%	84	83
Σ C : M	5 : 2	5 : 1	F+%	64	100
Fc+c+C' : FM+m	3 : 4	2 : 1	R+%	62	89
VIII + IX + X / R %	48	43	A%	52	52
F+Fc+FK / R %	48	61	At%	0	0
(H+A) : (Hd+Ad)	13 : 5	14 : 3	Content Range	7	8
F : FK+Fc	11 : 1.5	14 : 0	P	3	4

\*左欄が「不安定期」、右欄が「安定期」

(2) MMP I



—— 不安定期      - - - - 安定期

図1 MMPIプロフィール

MMP I は、「不安定期」ではPd尺度、Pa尺度、Pt尺度が高得点となり、F尺度、Sc尺度は120以上と突出したものになっている。「安定期」では、F尺度がやや高い得点を示しているが、他の尺度はすべて正常域に留まっている。

### (3) DES

表4 MMPIとDES得点

MMPI	?	L	F	K	Hs	D	Hy	Pd	Mf	Pa	Pt	Sc	Ma	Si	DES
T得点	62	37	120	41	66	61	68	94	45	110	93	120	84	58	74.28
	57	33	78	36	37	49	47	69	35	55	56	61	63	46	74.28

\*上段が「不安定期」、下段が「安定期」

DESは、「不安定期」では、平均74.28と高得点となっており、「安定期」では平均30.35とやや高いながらも低下を示している。

## IV. 考 察

### (1) 各種アセスメントについて

「不安定期」のMMP Iは従来言われてきた解離性同一性障害のプロフィールパターンと合致するものであり、Allenら(1993)は、患者の異常体験の多さと現実的思考の困難さを示していると述べている。「安定期」では、そうした特徴は消失し、訴えを誇張する傾向を残すのみとなっている。

また、DESの結果からは、「不安定期」では、解離現象を自覚的に体験していたと考えられるが、「安定期」では、苦痛の無視や没頭などの体験を残すのみとなっていると考えられる。

ロールシャッハ法については、量的分析において、感情統合の悪さは持続するものの(FC<CF+C)、現実検討力の回復(F+%・R+%の上昇)が見られた。

次に、これらの結果を踏まえ、ロールシャッハ法について各図版毎の検討を行い、従来の報告との照合をすることにしよう。

### (2) ロールシャッハ法について

#### a. 各図版における検討

#### カード I

[不安定期] 第一反応は、プロットを四分割し、中央に「二人の女の人」、両側に「二人の男の人」を見る。分割から全体統合への組織化が見られ、作話的な結合反応が示されている。「お腹が膨らんでいるところ」は、生殖・性愛のテーマを容易に連想させる。第二反応では、空白部分への注目が見られ、注意の焦点は周辺部から中央部へと移行している。「マント」「ペイント」は自己を覆い隠すものであるが、「正面向きの顔」は対自的関心を示している。

[安定期] 性別への関心及び作話的な言及は消失し、「キツネのペイント」もなくなっている。

#### カード II

[不安定期] 第一反応は、赤色領域と黒色領域の作話的な結合反応となっている。「クマの死骸」であり、「這いずり回った後の血」を見ており、攻撃と抑うつ、そして苦悶の感情が投影されている。「耳」への関心は、カード I の「キツネ」と同様に外界への警戒心を示すのかもしれない。[安定期] 内容的にはほとんど変わらないが、「死骸」は「死んでるような」と mild な表現となり、質疑段階でも不安定期のようなグロテスクな明細化はなくなっている。

#### カード III

[不安定期] プロット知覚そのものには歪みは見られないが、作話的結合反応となっており、内容は対象関係の断片化あるいは分裂が示されている。反応の明細化が進むに連れて、より原始的レベルへと退行し、カード I と同様に生殖のテーマが露呈されている。

[安定期] 「お腹の中の子」から「生まれる前の子ども」に表現が変化し、生命の危機から生命の維持(「へその緒で繋がっている」)へと変化している。解剖反応は「チョウチョ」といった形態反応となり、現実からの退行の程度も少なくなっている。

#### カード IV

[不安定期] プロット知覚そのものに歪みはないが、「大きなクマ」と「木」が作話的に結合され



表5 従来報告されたDIDのロールシャッハ特徴との照合

ロールシャッハ特徴	不安定期	安定期
<b>Wagner. etal (1983)</b>		
①運動反応が多い	○	×
②少なくとも二つの質的に異なるMがある	×	×
③少なくともひとつの運動反応の中に攻撃、屈服、追跡、破壊、束縛など知覚表象の形で圧迫感が投影されている	○	×
④色彩反応が三つ以上ありCF+C>FCである	○	○
⑤例えば「花」のような肯定的意味合いの反応と、例えば「血」のような否定的意味合いの色彩反応とが、それぞれ少なくとも一つ存在する	○	○
<b>Barach (1986)</b>		
①反応の否認。例えば質疑段階で自由反応段階での反応を再認できにくい。	×	×
②隠蔽。例：何かか隠されている、何かか何かからはみ出している、同時にそこにあるものに何かか気づいていない、マスク反応など。	○	×
<b>Labott&amp;Leavitt (1992)</b>		
①分裂反応。例：人体が裂けている。抽象的イメージが内的な圧力で切り離されている、動物や細胞が切り裂かれているなど。	○	×
②解離。例：霧があって、ぼんやりしている事物など。	×	×
<b>Armstrong (1991)</b>		
①内向型	×	×
②分裂指標が多い	?	×
③FDが多い	1個	×
④Blends	4個	1個
⑤Lambda	×	○
⑥Whole>Part	○	×
⑦Real>Fictional	○	×
⑧Traumatic Content=agg+mob+sex+anatomy+bl/R% 平均50 (30~120)	×	×
<b>福永 (1999)</b>		
①Wが多い	×	×
②作話性全体反応、継時性結合全体反応、作話性結合全体反応	○	×
③認知の流動性、浮動性	○	×
④運動反応が多い	○	×
⑤色彩<運動	×	×
⑥動物<人間	×	×
⑦文章型はASが多い	○	×

表6 Sugarman (1980) の境界性人格構造のロールシャッハ特徴

自我の脆弱性		感情統合			対象関係	原始的防衛機制	
一時的現実 検討力の障 害	境界のあい まいさ・思 考過程の障 害	攻撃	不安	抑うつ	部分対象関 係	分裂	投影性同一 視
F+% 低 R+% 低	IV「キツネ が化けた」  I II III IVの 作話的結合 反応  V VI IXの思 考の弛緩	II「クマが 撃たれ」  II「血」  III解剖	不安感情カ テゴリー  VIII未分化な 濃淡・色彩 との混合	II「死骸」  X「首折れ たシカ」  C' 反応	IIIの断片化	IIIの作話内 容	IV「クマ歩 いてくる」
不安 定期							
安 定期		II「血」		II「クマが 死んで」  C' 反応			

A.Sugarman (1980) The borderline personality organization as manifested psychological test.  
[in Kwawer, et al, ed : Borderline phenomena and Rorschach]

たものとなっている。隠したいけど「隠れない」といったテーマは、カードIを彷彿させる。「大きなクマ」の前進は、対象との距離を逸し、いわゆる投影性同一視と類似のものである。明細化が進むにつれて境界は曖昧となり「キツネが化けてクマになった」。

[安定期]「大きなクマ」と「大きな人」との決定の困難さは見られるが、「木」との結合はなくなっている。

#### カードV

[不安定期]「チョウチョみたい」と平凡反応を示すが、「葉っぱ」のイメージと loose に重なり合い、「羽」と「葉っぱ」が混交してる。認知面での流動性が垣間見られる。

[安定期] 平凡反応の「チョウチョ」を反応し、

説明も明確で混交は見られない。

#### カードVI

[不安定期]「天狗」は下部領域のみなら本来良形態であるが、上部を除くことができないために不良形態となっている。「バイオリン」の説明では、「天狗の鼻」の部分削除しており、突起部への注目が見られる。

[安定期]「天狗」と「バイオリン」は明確に区別されたものとなり、「天狗」は下部領域に限定されて良形態となっている。

#### カードVII

[不安定期]「子ゾウ」は一般に見られる領域に反応するものの、「耳」の位置が不適切で不良形態となっている。「女の人の輪郭」は、図と地が逆転した空白部分への反応であり、「顔は写って

いない]。「女の人」も「耳」への注目が示されている。

[安定期]「女の人」の反応は消失し、「子ゾウ」は部分領域に限定されて、良形態の反応となっている。

#### カードⅧ

[不安定期] 色彩刺激に圧倒されており、「トラ」は本来の良形態反応（平凡反応）が生じやすい領域から微妙にずれた領域への反応となっている。また、色彩領域の触感覚を伴った反応をしているが、「ザラザラ」であり快的ではない。

[安定期]「トラ」は良形態領域への反応となり、触感覚を伴った反応は消失している。

#### カードⅨ

[不安定期] 色彩に圧倒されて、形態の乏しい、混沌とした反応となっている。領域を制限することで色彩と形態の統合を試みるが不安定である。

[安定期] カード刺激そのものが複雑で曖昧なこのカードでは、安定期においても回復することは困難であったようであり、不安定期と同様の反応となっている。

#### カードⅩ

[不安定期] 色彩に圧倒されながらも、部分に制限し反応する。カード特性によるところが大きい。内容は、「葉っぱ」「樹液を吸う」「首が折れた」など、依存欲求の強さと抑うつ、傷つき体験が示されている。

[安定期] 権威への依存欲求は示されているものの、口唇期的依存や抑うつは陰を潜めている。

#### b. 従来の研究報告との照合

従来報告されてきた解離性同一性障害のロールシャッハ特徴と照合すると、表5の通りである。

「不安定期」では、各研究者の報告と合致する点が多く見られるが、「安定期」においてはほとんど見られなくなっている。

#### c. 人格構造特性

「不安定期」において合致がみられた特徴を、視点を変えて見ると、いわゆる境界例と類似する点が見うけられる。そうした特徴を明確にするために Sugarman のモデルを援用する。

Sugarman はカンバーグの境界性人格構造についてロールシャッハ上での現れ方を提唱しており、こうした自我機能の面から解離性同一性障害を捉えなおすことは意味あることと考えるからである。

表6に示したように、「不安定期」では、一時的な現実検討力の障害、境界のあいまいさ、思考過程の障害といった自我の脆弱性がみられ、感情は攻撃、不安、抑うつが不統合に混在し、分裂、投影性同一視といった原始的防衛機制が見られている。

一方、「安定期」になると、攻撃、抑うつ感情を残すのみで、自我の脆弱性や原始的防衛機制は見られなくなっている。

従来から、いくつかの事例報告の中で、境界例との類似は指摘されてきたが、本事例の特異性は、人格交代の頻繁な「不安定期」にはそうした特徴がみられたものの、人格交代のなくなった「安定期」にいたるとそうした特徴が消失したことにあると考えられる。

こうした変化をどう考えたらいいのか。Armstrong(1991)は、境界例患者と解離性同一性障害者との相違について、境界例患者は、自分の精神的な統合を維持する為に、外的な現実を分割して極度に分極化させているが、解離性同一性障害者は、対象関係性を維持する為に、自らの内的な現実を分離し隔壁を作るのであると述べている。そして、解離性同一性障害者は、距離をとり内省的な傾向があるために体験型が内向型となるのであり、そこが境界例患者とは違うと述べているが、本事例とは合致しない。境界例との相違について、ロールシャッハ法を用いた研究は他に見当たらない為、これ以上考察を深めることは出来ないが、本事例を通して言えることは、解離性同一性障害者は、その不安定な時期においては、境界例類似の自我の脆弱性と原始的防衛機制を示すものの、経過により安定するとそうした傾向は消失するという点であり、その点、境界例患者と異なると言えるのではないかとと思われる。

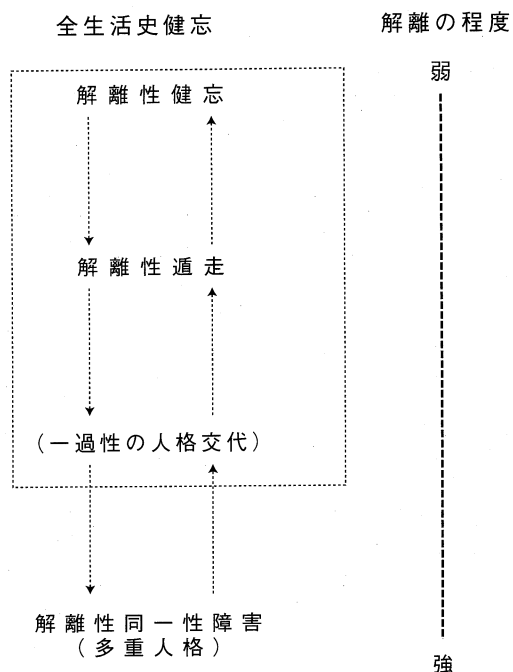


図2 DSM-IVの解離性障害と全生活史健忘の関係 (高橋、1998)

次に、高橋(1986)、Ross(1989)が提唱するように、解離の深さによって、解離性健忘、解離性遁走、一過性の人格交代、そして解離性同一性障害といったように解離性障害を一連続線上に捉えた場合(図2)、現実検討力や思考障害、原始的防衛のあり方など、境界例的な側面の程度と解離の深さは相関するのではないかと考えられる。これは、本事例においてDESやMMPIの解離特性が少なくなった時期にロールシャッハにも変化が見られたこと、そして、我々が以前に関わった全生活史健忘のロールシャッハ結果を踏まえた経験的な推測に基くものであるが、実証性にたるものではない。さらなる検討が必要である。

#### d、神話性

織田(1999)は、神話について次のような三つの見方を提示している。(1)ある民族や文化を基礎づける機能をもった、人間と超越者たちとの交流の物語(2)平時には、地下水のように表面に現れないが、個人や国家や民族や文化の、

危機的状況にある時には顕在化するという特徴をもつ(3)われわれの個性を無視するような普遍性を帯びている。このような意味を持つ物語を「神話」と考え、「狭義の神話」と呼んだ。

他方、個人の生来的なものの影響や親子関係や成長過程でのさまざまな体験によって形作られ、個別の価値観やこだわりを持ち、生を支えるものあるいは基礎づけるものを「広義の神話」すなわち「個人神話」と呼んだ。そして心理療法過程においては、患者のみならず治療者自身も「個人神話と神話に同等の価値を置き、両者の対応関係を検討する」ことの大切さを説いた。

この視点をRor法に適用するならば、おそらく被験者の示す作話的な反応の中に多くの神話と個人神話が語られることになるだろう。

つまり、それはSchafer(1954)が述べるように現実的知覚から夢のレベルへと精神機能が退行した時点で顕在化すると考えられるだろう。本事例を見ると、カードIからIIIの間に、「愛する」「産む」「死ぬ」「闘う」「傷つく」「生まれる」といった多くの神話を通して伝えられる「生きる」ことの根源が語られている。

そして、個人神話として親子関係が顕在化しており、安住の地とはなり得なかったことが語られている。

とくに、母との間には激しい様々な怒りが交錯していたようであり、カードVIIでは実体の希薄な母親像が象徴的に示されている。

一方で、A子自身の中から噴出する怒りは、「悪いことに手を染めた」(カードIII)自己へと向けられ、自己の分裂(解離)を生じずには命を保てない程に強烈なものであるのだろう。自らの身を「ひとりの私」では保つことができずに「たくさんの私」が必要であったことは想像に難くない。

#### V. おわりに

われわれは、神話を生きている。神話は普遍的であり個人的でもある。個人の神話を通して普遍的な神話をフラクタルに見通す能力を養う

ことは臨床にとって必須のこととなるだろう。

本論では、解離性同一性障害のロールシャッハ反応を、従来の見解と照合しながら、境界例心性との類似性及び退行レベルで生じる神話性について触れた。

## 参考文献

- Armstrong, J. (1991) The Psychological Organization of Multiple Personality Disordered patients as revealed in Psychological testing. *Psychiatric Clinics of North America*, 1991, Sep, 14(3), 533-46.
- 藤田裕司 (1997) ある殺人未遂犯のロールシャッハ反応. *犯罪心理学研究*, 35 (1), 37-47.
- 福永知子 (1999) 解離性同一性障害 (多重人格性障害) の一事例研究. *ロールシャッハ法研究*, 3, 37-50.
- Labott&Leavitt(1992) Rorschach indicators of Multiple Personality Disorder. *Percept Mot Skills*, 1992 Aug, 75(1), 147-58.
- 織田尚生 (1999) ユング派の方法論と神話. *東洋英和女学院大学心理相談室紀要*, 3, 28-31.
- Putnam, F. W. (1989) *Diagnosis and treatment of multiple personality disorder*. Guilford Press.
- Ross, C. A. (1989) *Multiple Personality Disorder*. J. Willey&Spns.
- Schafer, R. (1954) *Psychoanalytic interpretation in Rorschach testing*. New York: Grune&Stration.
- Sugarman, A.(1980) The borderline personality organization as manifested psychological test. [in Kwawer, et al.: *Borderline Phenomena and Rorschach*.]
- 高橋祥友 (1986) 長期にわたる全生活史健忘を呈した2症例—長期化因子と自殺の危険性—. *精神医学*, 15, 1535-1541.
- 上芝功博 (1995) ロールシャッハ法からみた多重人格. *精神療法*, 21, 533-540.
- Wagner, E. E. (1983) *Structural Analysis. A theory of personality based on projective techniques*. *J. Pers. Ass.*, 35, 422-435.
- 吉田司、他 (1994) 多重人格の一症例. *矯正医学*, 42 (2-4), 19-40.

